**命の軽視　一貫して許さず**

**社会学者・立岩真也さんの遺志とは…**

**「障老病異」を考察、生存学の礎築く**

　社会学者の立岩真也さんが６２歳の若さで亡くなった。病や老い、障害とともに生きることから社会を考察する「生存学」の礎を築いた。２０１６年に起きた相模原市の「津久井やまゆり園」殺傷事件では安楽死に肯定的な論説を痛烈に批判し、生きる意味を問い続けた。引き継ぐべき遺志を考えた。（**木原育子**）

　ビデオ会議システムで取材した時には、部屋に必ず飼いネコが登場し、いつも場を和ませてくれた。そんな立岩さんが七月三十一日、悪性リンパ腫で世を去った。ブログには三月以降、闘病生活がつづられていた。「血小板の輸血始まり」「温かいものが飲めるように」。今月二十二日を最後に更新は止まっていた。

　二〇〇七年にできた立命館大生存学研究センターを率い、今年三月まで後継の研究所で所長だった立岩さん。さまざまに異なった身体で生きる人々の経験を集め、社会に問う「障老病異」が理念の拠点だった。

　同所の上席研究員、長瀬修さん（６４）は「偉大な研究者であり教師であり、リーダーだった」と称する。

　出会いは一九九六年。立岩さんは信州大医療技術短期大学部の専任講師だった。障害学の立ち上げ構想を持ちかけ意気投合。「大いに盛り上がって、初対面なのに自宅に泊めてくれてね。昔から気さくで開けっぴろげだった」

　二〇〇三年に長瀬さんと障害学会を設立。東アジアにも広げ、国際セミナーも開かれた。「障害や生存の課題は国境を超えると意識していた。彼は国内の社会課題の発信をしてきたとみられがちだが、国際色も豊かだった。各国から追悼メッセージが届いている」

　朝日新聞の元論説委員でジャーナリストの大熊由紀子さん（８３）は、〇一年に自身の新たな旅立ちのために開かれた会に触れた。参加した立岩さんの姿が忘れられない。「皆がさまざまな話題で盛り上がる中、壁に一人寄りかかり、冷静に観察する風情が彼らしかった。まだ無名の研究者だったが、『彼も来たのか』と知る人ぞ知る存在、当時から一目置かれていた」

　尊厳死や安楽死に反対の立場を貫いた立岩さん。一六年に相模原の殺傷事件が起きると「本人のためという言葉を使って、実のところは私たちの都合の良さを実現するのが優生思想・安楽死の常套（じょうとう）手段」「事件の被告の姿は私たちにつながる」と本質を突いた。

　障害者施設だけではなく、精神科病院の強制入院にも異を唱えた。二一年の「こちら特報部」の取材に「今まで病院にかけていたお金を地域ケアにかけるようバランスを変えればいいだけ」と指摘。厚生労働省に「政策転換を本気でやってもらいたい」と訴えた。

　薬害問題にも関心を持った。交流した一人が、カルテ開示市民運動を展開した医療事故遺族の勝村久司さん（６２）。「気難しい印象かもしれないが、ユーモアもあっておしゃれ。京の町を小型バイクで軽快に走っていた」

　勝村さんは、京都の病院に設けられた医療倫理に関する外部委員会で立岩さんとともにメンバーだった。以後もインタビューの依頼が届くなど、交流を持ち続けた。「障害や病気が原因で生きることを軽視されたり、阻害されたりすることがあってはならないと一貫していた。そこを妥協すると、患者や障害者らの生きにくさを助長すると早くから気づいていた」

　筋萎縮性側索硬化症（ＡＬＳ）で呼吸器を付ければ生きていくことができる人が、その選択をせず、生を全うしたとされる社会のあり様に異を唱え続けた立岩さん。一七年の本紙取材にこう答えた。「人には死ぬ権利があると言っていい。しかし、いざとなった時に、死にたいという人は非常に少ない。『生きていい』社会にしてもらいたい」